

海ごみはどこからやって来る？講座 開催しました！



- 日時 令和5年5月13日(土)10:00~12:00
- 場所 北原自治会館、羽立海岸(さぬき市津田町津田)
- 講師 谷 光承 氏 (かがわ海ごみリーダー)
- 講師アシスタント 吉岡 純菜 氏 (かがわ海ごみリーダー)
佐々木 春日 氏(かがわ海ごみリーダー)

5月13日(土)、北原自治会館、羽立海岸にて、「海ごみはどこからやって来る？」講座を開催し14名が受講しました。本講座では、海岸フィールドワークを通じて海ごみがどこから来るのかを学び、自分の生活と海のつながりを考えるきっかけとなることを目的として開催しました。

初めに、3グループに分かれて自己紹介を行いました。初めて講座に参加する学生の方が多く、海ごみやSDGsについて興味を持ち、今回の講座に参加したという声が多く聞かれました。そして、講師より海ごみ調査にあたり、海ごみの調査方法、漂着物の代表的な例、海ごみを拾う際の注意点などの説明を聞いた後、羽立海岸へ移動しました。



今回の調査では、「国際海岸クリーンアップ(ICC)」調査項目に日本独自の項目としてカキ養殖用パイプやまめ管などを加えたICCデータカードを使用しました。ICCデータカードはタバコの吸い殻、プラスチックボトル、食品容器、レジ袋、生活雑貨など45品目に分類されており、品目ごとに個数を調査しました。海岸には飲料ボトルキャップ、使い捨てライター、食品容器などたくさんのプラスチックごみが散乱していました。また、カキ養殖用パイプやまめ管を初めて見た受講者の方も多く、その量の多さに驚いていました。



さらに、海岸の砂浜をよく見てみると、人工芝の破片、田植えで使用される肥料カプセル、プラスチックの原料となるレジンパレット、マイクロプラスチックと呼ばれる直径5mm以下の微細なプラスチックごみなど、一見ただけでは見逃してしまいがちな小さなごみも多く、受講者から、“普段気付かなかったものが見えるようになり、意識の幅が広がった”という声も聞かれ、受講者たちは新たな気づきを得た様子でした。



北原自治会館に戻り、グループごとに調査結果と感想をまとめ、代表者が発表しました。調査の結果、「カキ養殖まめ管」が最も多く、次いで「硬質プラスチック破片」、「飲料用ボトルキャップ」などが多かったという結果になりました。受講者から、“予想していないごみが多かった”、“なぜまめ管が多く流出してしまうのか知りたい”などの感想がありました。

その後、講師より、「海洋ごみの現状」、「日本の海洋ごみはどこからやって来て、どこへ行くのか」、「県内の河川や海岸での調査結果」、「脱プラスチックのために私たちが出来ること」についての座学がありました。

最後に、“あなたは、どのような海にしていきたいですか？”という講師の問いかけがあり、講座終了後のアンケートでは、“海ごみの量に驚いた”、“海ごみを減らすために自分の生活を見直していきたい”などの感想が寄せられ、海と自分の生活が密接に関わっていることを改めて実感する大変有意義な講座となりました。

品目	個数
カキ養殖用パイプ	1
硬質プラスチック破片	1
飲料用ボトルキャップ	1